

辻 哲也（編著）

がんのリハビリテーションマニュアル 第2版 周術期から緩和ケアまで

志真泰夫

筑波メディカルセンター代表理事

今日、がん医療では治療やケアの進歩に伴い、患者の生存期間が延長し、がんと共に生きる時代となった。

わが国におけるがんのリハビリテーションの黎明期は、2002年に静岡県立静岡がんセンターが開院し、リハビリテーション科が設けられたことに始まる。その時の初代部長は、本書の編者の辻哲也先生である。そして、2010年度診療報酬改定で「がん患者リハビリテーション料」が設けられて、これを契機としてがんのリハビリテーションの成長期が始まった。それから4年を経て「がん対策基本法」（2016年改正）第17条に「がん患者の状況に応じた良質なリハビリテーションの提供が確保されるようにすること」と定められ、がんのリハビリテーションは法的な根拠を持つようになった。そして、本書初版から10年を経て、この間の臨床と研究の成長を踏まえて、第2版が発刊された。

さて、本書を手にとると、編者の視野の広さと目配りの細やかさに驚

かされる。私は「マニュアル」というものを通読する本ではなく、必要に応じて手に取って開くものと思っている。しかし、本書はまず「目次」にしっかり目を通してほしい。第Ⅰ章は総論、第Ⅱ章は原発巣別・症状別・ライフステージ別の診療の実際、第Ⅲ章は緩和ケア主体の時期の診療、について解説されている。臨床の場で実際に困ったり、疑問に思ったりすることがあれば、第Ⅱ章から拾い読みをするのがよいだろう。例えば、「リンパ浮腫」の項は、疫学に始まり、病態生理、診断、治療とコンパクトにまとまっており、中堅・若手の外科医にはぜひ読んでほしい。

緩和ケアに関心があり、実際に携わっている者は、第Ⅲ章を通読することをお勧めする。「患者のQOL」、「その人らしく生きる」という2つのキーワードは、リハビリテーションと緩和ケアに共通している。そして、リハビリテーションと緩和ケアは、同じ方向を指すベクトルを持っ

ている。患者のQOLは言うまでもなく「主観的」、「多次的」であるが、「その人らしく生きる」ということは、「個性」を尊重し、「多様性」を認めることである。そして、時間の限られたこの時期にあっては、患者の希望と要望をしっかり受け止めて、それをかなえるために多職種チームによるアプローチが必要不可欠である。

最後に「ケース紹介」と「付録動画」について触れておきたい。本書の第Ⅱ章では各節ごとに事例（ケース）の紹介がある。この間の臨床の積み重ねが生かされており、臨床実践の実際がイメージできるようになっている。さらに、さまざまな技法について動画を用いた学習ができるように配慮されている。動画視聴もぜひお勧めする。

●B5/頁436/2021年09月

定価：5,500円

（本体5,000円＋税10%）

[ISBN978-4-260-04643-5]

医学書院 刊